

THE HAPPY HOLLISTERS

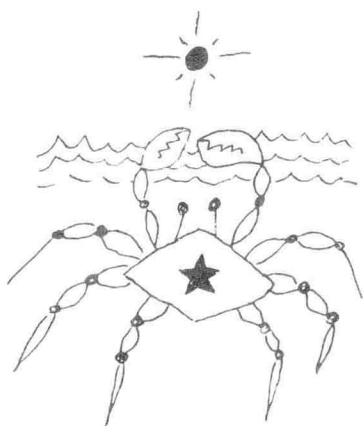
たから

だい そう さ

宝さがし大捜査

ジェリー・ウェスト 著
か かみ さぶ ろう やく
各務三郎 訳





宝さがし大捜査

THE HAPPY HOLLISTERS

ジェリー・ウェスト 著 各務三郎 訳

ハッピー・ホリスター・シリーズ③

宝さがし大捜査——一九八〇年十月十七日 初版 定価 八五〇円

著者、シェリイ・ウエスト JERRY WEST

訳者、各務三郎 ©Saburo KAGAMI 1980

8397-206930-8715

編集人、守屋健郎 発行人、大原規男

発行所、読売新聞社

〒一〇〇東京都千代田区大手町一七一一

〒五三〇大阪市北区野崎町八一〇 〒八〇二北九州市小倉北区明和町一一一

印刷所、図書印刷株式会社 製本所、ナショナル製本 へ落丁乱丁本はおとりかえます

まえがき

各務
三郎

「宿題すんだらハッピー・ホリスター」

これは、ハッピー・ホリスター・シリーズ第一巻『引越し大作戦』についている腰巻きの宣伝文ですね。腰巻きとは、本に巻きつけてある宣伝用の帯のこと。出版社のいささか品のよくない編集者の人たちは、こう呼びます。

「宿題すんだらハッピー・ホリスター」ですか！ いい宣伝文句ですねえ。

わたしは、ついさっきまで、団地の広場で紙ヒコーキを飛ばしていました。折り紙ヒコーキのことではありませんよ。『よく飛ぶ紙飛行機集』という本を買ってきて、切り抜いて、のりで張りあわせた小さな紙グライダー！。

これが飛ぶんです！ ゴムのカタパルトで発射すると、三〇～四〇秒も滞空しています。うまく

風に乗ると、遠くの家の屋根や木にひっかかって回収不可能になるくらい。

きみたちくらの男の子や女の子が寄ってきて、「……にも飛ばさせて！」とうるさいこと！

じつをいうと、わたしは、机に向かって仕事をしている時間なのですが、おもしろいので、つい、もう一ぺんだけと飛行機を飛ばしてしまおう——「ハッピー・ホリスターを読みおわったら、宿題やろう」という心境なのです。

さて——ハッピー・ホリスター物語は、第三巻、『宝さがし大捜査』です。ラスおじさんが、ホリスター夫人に陶製の燈台を送ってきました。この置き物の燈台は、スイッチを入れると明かりもつきます。ところが、犬のジップのいたずらで、燈台はこわれてしまいました。

ピートは接着剤で修理しようしますが、どうだろう、中から小さな宝石、エメラルドが出てきたんだ！

物語は、百年前にかもめ海岸で難破した海賊船さがしが中心になります。ホリスター家の五人きょうだいは、はたして海賊船を発見することができるでしょうか？

宿題などとつくにすませたらしいホリスターきょうだいは、いろんな冒険を楽しみます。かもめ海岸の砂丘地帯を砂上車でドライブしたり、海につきでた砂州で遊んでいるうちに潮が満ちてきて溺れかかったり、オールデンおばあさんのおいしいはまぐりパイを味わったり、ヘリコプターに

乗^のつてくじらを見たり……。ほんとにこんな胸^{むね}がおどるような冒険がしてみたいものです。

そりゃあ、わたしだって、こどものころは、夏休みの宿題などそっちのけで遊びましたよ。第二次^{だいじに}大戦^{たいせん}が終わってまもないころ、『ターザン、紐育^{ニューヨーク}へ行く』という映画^{えいが}を見たことがあります。オリンピックの競泳^{きやうえい}種目^{しゆもく}で金メダルをとったジョニー・ワイズミューラーがターザン役^{やく}でした。警官^{けいがん}に追われたターザンが高い吊り橋^{つりばし}の上からハドソン河に飛びこむシーン。これがじつにカッコよかったです。

山の中に大きな池^{いけ}がありましたね。町から歩いて三〇分くらいかかるのですが、その池で友だちや上級生^{じやうきやうせい}たちと泳ぐ^{およ}のです。岸^{きし}のそばに大きな松がはえていて、枝^{えだ}が池の上にのびていました。それを吊橋^{ていけう}にみたてて、「ア、ア、アーッ!」ととなりながら、三メートルほど下の水に頭から飛びこむんです。

こわいですよ! 二階の屋根から飛びこむのと同じです。でも、臆病者^{おくびやうもの}! とからかわれるのが嫌^{いや}ですから、ターザンみたいに吠^ほえながら空中に飛びだしていくのです。へ腹^{はら}ブチンで落ちたら目もあてられない。痛い上に、腹や顔がまっかになってしまふ。みなさんもへ腹^{はら}ブチンには、ご用心^{ご用心}! ハッピー・ホリスター・シリーズを訳^{やく}していて、いつも気にかかる男の子がいます——いたずらっ子のジョーイ・ブリルです。今回はあまり登場^{とうじやう}しませんが、それでも海賊劇^{かいぞくげき}のなかで、女の子の

水夫につかまる筋書きを嫌って、大暴れしてしまいます。

わたしも、こどものころ、ジョーイみたいにならずらが大好きで、しかもひねくれた考えを持っていたので、ジョーイが登場すると、自分のことのようにハラハラします。「かばってやりたくとも、あれじゃ、ひどすぎるぞ」と、手を引っぱってきて、小声で叱ってやりたくなるのです。

この物語では、ジョーイにかわって、ホーマーという男の子が、ひどいいたずらぶりを発揮しています。「早く、あやまってしまつて仲間に入れてもらえよ、ジョーイ。みんなと遊びたいんだろ、ホーマー？」

きみたちは、どう思う？ やっぱり、ジョーイやホーマーなんか、大嫌い？

宝さがし大捜査
たから
ハッピー・ホリスター
だいそうさ

*目次
もくじ

第一章	おい、その船！	11
第二章	船乗りのおじいさん	23
第三章	すごい贈物	35
第四章	ランプの秘密	46
第五章	子犬救出作戦	59
第六章	ちっほけなカニ	71
第七章	ジェニー・ジャンプ	82
第八章	卵どろぼう	94
第九章	海底を歩く	104

第十章 砂すなの城しろ 115

第十一章 水難救助員すいなんきゅうじゅいんの話はなし 125

第十二章 砂上さじょうの格闘かくとう 135

第十三章 人形にんぎょうだこ 145

第十四章 仮小屋かりごや 157

第十五章 感激かんげきの午後ごご 169

第十六章 潮しおを吹ふいた！ 181

第十七章 ハリケーン 190

第十八章 大勝利だいしょうり 199

装幀／長友啓典
イラスト／黒田征太郎

ハッピー・ホリスター
宝さがし大捜査

第一章 おーい、その船！

ホリスター家のきょうだい、ピートとパムは、歩道をローラースケートですべっている。猛スピードだ。やっと郵便配達のおじさんに追いついた。

「ねえ、バーンズさん！」パムは、興奮して、茶色の目をきらきらさせながら叫んだ。「ラスおじさんから、わたしたちに、手紙がきていない？」

ホリスター家の広い家の前で、白髪の郵便屋さんは、にっこり笑って、立ち止まった。ピートとパムは、スケートを横すべりさせて、急停止した。

「ハッピー・ホリスターきょうだいあての手紙があったはずだぞ」バーンズさんは、鞆の中に手を入れながらいった。「たしか、かもめ海岸の消印がついてたな」

「それだよ！」ピートは、短く刈りあげた金髪を指でくしゃくしゃやりながら、うれしそうにいった。

おじさんはパムに手紙を渡した。ふたりはスケート靴をぬぎすてて、芝生に腰をおろした。

パムは封を切り、手紙を読んだ。

「かもめ海岸に海賊船があるんですって！」パムは叫んだ。

「海賊船だって？ ぼくにも読ませて！」とピートはいった。

五人のホリスターきょうだい、長男ピートは十二歳。大きな青い目、明るい笑顔、たくましい肩をした人なつこい少年である。二歳下の妹のパムは、金髪をおかっぱにしている。やさしくて思いやりがあるので、ショーレムの友だちのみんなから好かれている。

「へえー！」ラスおじさんの手紙を読みながら、ピートはいった。「この海賊船が見たいなあ」

こどもたちの大好きなラスおじさんは、背が高く、ハンサムで、お父さんにそっくりだ。新聞に漫画をかいている。おじさんは、かもめ海岸へスケッチに行ったら、ホリスターきょうだいに手紙を書くと約束していた。

「声を出して読んで」パムがせがんだ。

「オーケー。読むよ」

先週、おじさんは、ここでミステリー号という海賊船をさがしている人たちに出会いました。

話によると、難破したその海賊船は、このあたりの海岸にうまっているらしい。なにしろ、百年前のことだからね。よかったら、きみたちもしばらくこっちへきて、宝船をさがしてみないか？ お母さんとお父さんにたのんでごらん。

愛するラスおじさんより

追伸 お母さんに、おじさんからいいものが届くと、いっておいてください。

二人は、さっと立ちあがった。

「海賊の宝さがしなんて、すごいじゃないか！」ピートは、いった。「あれ、封筒についていることの変なマークはなんだろう？」

消印のとなりの青い四角の中に、男の子がたこをあげている絵がついている。その下には、次のような文字があった。

たこあげ大会

かもめ海岸

八月十七日

「こいつはいいぞ。ラスおじさんのところへ行くことになれば、たこあげ大会に出場できるかもしれないよ」

「女の子も参加できるかしら？」パムはきいた。

「手紙を書いて、きいてみよう」ピートがいった。

パムが手紙をポケットにしまったとき、七歳のリッキー・ホリスターが、コースター・ワゴンをひいて、インディアンみたいに黄色い声をあげながら車寄せを走ってきた。ワゴンに乗って、しっかりとつかまっているのは、ふたりの妹だ。ホリー、六歳。スー、四歳。

リッキーは、ピートとパムに気がついて、急にふたりのほうへ向きを変えた。そのとたん、ワゴンが傾いた。小さな妹たちは芝生の上にごり落ちた。妹たちは、笑いながら起きあがった。スーがいった。

「わたしのばったがいなくなっちゃった。ひどいわ、リッキー」

リッキーは、わけがわからなくて、妹の顔をじっと見つめた。やっと意味がわかった。

「心配するな。別のばったをつかまえてやるよ」リッキーはなぐさめた。

リッキーは、ホリスター家でしたひとり、赤毛の持ち主である。その髪はいつもくしゃくしゃで、そばかすや、上を向いた鼻や、青い目や、かわいらしい笑顔とよくあっている。